

聖書：マルコの福音書 1：1～8

説教題：神の子キリストの福音のはじめ

日時：2025年4月27日（朝拝）

今日から5年ぶりに福音書をともに読んでまいりたいと思います。杉並教会に来てからすでにルカの福音書とマタイの福音書から講解説教を行いました。残りはマルコの福音書とヨハネの福音書になりますが、ヨハネの福音書については小畑先生から神学校卒業の頃に「あれはおじいさんになってから書いたものだから、頭の毛が全部なくなってからでないダメ」と言われました。とするとヨハネはもうちょっと（？）後からの方が良いかと思い、今回はマルコの福音書からとさせていただいた次第です。ちなみにその時、小畑先生に「先生はどこから説教を始めたんですか」と尋ねたところ、「マルコだったかな～。ただ福音書は結構難しいんだ。あれはイエス様のお話だからな」と言われました。確かに福音書は親しみやすい気もしますが、イエス様の言葉は意味が深くて本当にこれで良いのか、何かポイントを取り違えていないだろうかと思ひながら、他の福音書を説教した時、思いました。私は前任地の小倉台教会時代、1996年（今から30年近く前）にマルコの福音書の講解説教をしたことがあります。まだパソコンを持っておらず、ワープロで原稿を打っていた時代のため、データは残っておらず、紙に印刷したもののみ手元にあります。その時と比べて果たしてどれくらい成長したか、あるいは成長していないのか、以前の原稿と比べることが楽しみのような、怖いような気もしておりますが、神様に期待しつつこの福音書をご一緒に読み進めて行けたらと思います。

さて冒頭の一節は「神の子、イエス・キリストの福音のはじめ」と始まります。これはこの福音書の表題のようなものと考えられます。原文で最初に来ているのは「はじめ」という言葉です。この言葉でマルコは神が新しいことを始めておられること、その新しいみわざの始まりについて書くということを言おうとしていると思われまます。ではそれは何の「はじめ」でしょうか。それは「福音の」と続きます。「福音」とは良い知らせ、グッドニュースのことです。古代世界では良い知らせとは戦いの勝利を告げること、あるいは支配者の即位の告知などを指しました。一方、旧約聖書では神が終わりの時に与えてくださる救いの良い知らせ、回復の知らせを指して使われました。イザヤ書 52 章 7 節：「良い知らせを伝える人の足は、山々の上にあつて、なんと美しいことか。平和を告げ知らせ、幸いな良い知らせを伝え、救いを告げ知らせ、

『あなたの神は王であられる』とシオンに言う人の足は。」 イザヤ書 61 章 1 節：「神である主の霊がわたしの上にある。貧しい人に良い知らせを伝えるため、心の傷ついた者を癒やすため、主はわたしに油を注ぎ、わたしを遣わされた。捕らわれ人には解放を、囚人には釈放を告げ、・・・」。そのような良い知らせ、福音がついにここに与えられた。それが現実化し始めた。その福音のはじめを記すということなのだと思います。つまりマルコはここに新しい時代の幕開けについて書こうとしているのです。

ちなみに当時のギリシャ・ローマ世界において良い知らせ、福音という言葉は複数形で表現されたようです。良い知らせは色々あって、ある「良い知らせ」は数ある良い知らせの中の一つということになります。しかし新約聖書における福音という言葉は常に単数形です。つまり良い知らせはただ一つであるということです。それはイエス・キリストの福音のみということです。それ以外に福音はないということです。

その福音とは「イエス・キリストの福音」であると 1 節にあります。欄外に別訳として「キリストであるイエスの」とあります。イエス・キリストとは、ご存知の通り、苗字と名前ではありません。キリストとはヘブル語のメシアに相当し、油注がれた者という意味です。これは神がやがて与えてくださる救い主を指す称号でした。そのメシアはイエスであると 1 節で言われているわけです。地上に現れた人間イエス、歴史上の人物イエス。その方こそ約束のキリスト、救い主であるということです。そして原文では一番最後に「神の子」とつけられています。これはこの方は神ご自身であるということです。ちなみにイエス様はご自分からこのことは言われませんでした。「わたしは神である」とか「神の子である」と宣伝することはありませんでした。ご自身が言うのではなく、人々が自らの目を見て、自らの告白として、そう述べることを期待し、求められました。そしてこのことについては、この福音書の 15 章 39 節の百人隊長の告白、「この方は本当に神の子であった」という言葉において頂点に達します。何とイエス様が十字架上で息を引き取られたお姿を見て百人隊長はそのように述べました。このことは私たちはイエス様のどこに神としての姿を見るべきなのか、とても大切なことを示唆していると思います。「神」である方が人となってこの世に現れ、約束の福音、救いの良い知らせをもたらしてくださいました。そのようなこの福音書が記すメッセージのエッセンスを、1 節の表題は端的に記しているわけです。ですから私たちもこの福音書を読むことを通して神が遣わしてくださったメシアであるイエス様は神の子であること、神であるお方が私たちのところに来て約束の福音を現実

のものとし、差し出してくださっていることを知って、その福福に豊かにあずかる者とされたいと思います。

続く 2～3 節には「預言者イザヤの書にこのように書かれている」と記され、旧約聖書から引用されています。これはイエス・キリストの福音は旧約の預言の成就であることを示しています。1 節に「福音のはじめ」とあった通り、神は新しいことをここで始めておられますが、それはこれまでの旧約における啓示やイスラエルの歴史と無関係ではないのです。むしろ旧約聖書において示され、準備され、長い間待ち望まれて来た終末的な良い知らせが、ついにここに実現し始めたということをマルコは言っているわけです。この 2～3 節の言葉は出エジプト記 23 章 20 節、マラキ書 3 章 1 節、イザヤ書 40 章 3 節を組み合わせた言葉です。それがイザヤの名で代表されています。言われていることはメシアの前に先駆者が遣わされること。その彼は主の道を用意すること。ここにイエス様のことが「主」と言われています。旧約において「主」は神を指す言葉でした。ですからここにイエス様は神と等しいこと、神ご自身であられることが示されています。この預言に従って、まず先駆者ヨハネが遣わされたことがこの後、述べられます。こうして旧約の長きに亘って約束されて来た福音が今ここに「神の子イエス・キリストの福音」として明らかにされ始めたのです。その始まりについてマルコは書くのです。

4 節以降に、今見た旧約の預言に従ってバプテスマのヨハネの出現のことが記されます。旧約最後の預言者マラキ以降、約 400 年間、預言者は途絶えたままでした。その 400 年間の沈黙を破って、このヨハネにおいて神の活動が現れ始めたのです。彼は荒野に現れたとあります。荒野は伝統的に神と出会う場所であり、そこは試練の場、悔い改めの場、そして神によって豊かに養われ、祝福される場として用いられて来ました。その荒野で彼は悔い改めのバプテスマを宣べ伝えました。このバプテスマが何を背景として出て来たのか、起源を巡って色々論じられていますが、確かなことは良く分かりません。似た儀式としてクムラン教団の日ごとに繰り返されるきよめのバプテスマや、外国人がユダヤ人に帰依する際の改宗者のバプテスマとの関連が考えられたりしますが、類似点は認められるものの、このヨハネのバプテスマが独特なものであったことが分かるのみです。彼のバプテスマは「悔い改めのバプテスマ」と言われています。悔い改めとは考えを変えるという意味の言葉です。それまでの考え・態度・行動を変え、方向転換することです。神を中心にせず神から離れて自分勝手に歩んで

いたあり方を省み、悲しんで神に立ち返ることです。それは「罪の赦しに導く」とあります。人は悔い改めという道を通して神による罪の赦しを受けるのです。このヨハネのもとに多くの人々がやって来て、自分の罪を告白し、ヨルダン川でバプテスマすなわち洗礼を受けていたとあります。そのヨハネの風貌が6節に記されています。これは列王記第二1章8節に記されている預言者エリヤの姿を彷彿とさせるものです。

そのヨハネのメッセージが7～8節にあります。彼は7節で言います。「私よりも力のある方が私の後に来られます。私には、かがんでその方の履き物のひもを解く資格もありません。」 人々の中には400年の沈黙を破って現れたヨハネこそ来たるべきメシアではないかと思った人もいたようです。しかしヨハネは自分ではないと言います。私の後に来られる方こそ私にはるかに勝る方である。当時、靴の紐を解くのは奴隷の仕事でした。しかしヨハネはその方の前では自分はその奴隷の仕事をする資格もない者だと言って、人々の目を来たるべき方に向けようとします。

そして8節で「私はあなたがたに水でバプテスマを授けましたが、この方は聖霊によってバプテスマをお授けになります」と言います。これはヨハネのバプテスマは単なる水のバプテスマであって何の力も意味もないということではありません。彼のバプテスマを神から出た規定であって、やはり恵みの手段です。そこには祝福が伴っています。しかし後に来る方のバプテスマは、その程度と質において別次元のものであると言っているのです。それは聖霊によるバプテスマとされています。旧約の預言者たちはメシアが来られる終末の時代を聖霊が注がれる時代として預言しました。イザヤ書32章15節：「しかし、ついに、いと高き所から私たちに霊が注がれ、荒野が果樹園となり、果樹園が森と見なされるようになる。」 イザヤ書44章3節：「わたしは潤いのない地に水を注ぎ、乾いたところに豊かな流れを注ぎ、わたしの霊をあなたの子孫に、わたしの祝福をあなたの末裔に注ぐ。」 エゼキエル書36章25～27節：「わたしがきよい水をあなたがたの上に振りかけるそのとき、あなたがたはすべての汚れからきよくなる。わたしはすべての偶像の汚れからあなたがたをきよめ、あなたがたに新しい心を与え、あなたがたのうちに新しい霊を与える。わたしはあなたがたのからだから石の心を取り除き、あなたがたに肉の心を与える。わたしの霊をあなたがたのうちに授けて、わたしの掟に従って歩み、わたしの定めを守り行うようにする。」 ヨエル書2章28～29節：「その後、わたしはすべての人にわたしの霊を注ぐ。あなたがたの息子や娘は預言し、老人は夢を見、青年は幻を見る。その日わたしは、男奴隷

にも女奴隷にも、わたしの霊を注ぐ。」　このようなきよめの祝福、いのちの祝福、回復の祝福をキリストがもたらしてくださるということです。聖霊の注ぎという旧約の預言者たちが預言して来た終わりの日の祝福を豊かに成就してくださる方であるということです。ヨハネはこのようにイエス様を紹介し、その方を待ち望みなさい！と人々の目を向けさせました。そして次回の箇所から、そのイエス様が登場することとなります。

以上、旧約における準備を経て、ついに神はイエス・キリストにおいて約束して来られた福音を現実のものとし始めておられます。旧約の預言者たちが語り、待ち望んできた素晴らしい救いのビジョンは、このイエス様においていよいよ実現しようとしています。その福音の「はじめ」を記したのがこのマルコの福音書です。私たちはこの書を読むことを通して、神がついに明らかにされた福音とその素晴らしさを知り、ここに神が始められた救いのみわざに豊かにあずかる者とされたいと思います。イエス様が与えてくださる聖霊のバプテスマの祝福を良く知り、これに豊かに生かされる者たちとされたいと願います。

またマルコはこの書の内容は「神の子イエス・キリストの福音のはじめ」であると言いました。「はじめ」であるということは終わりにはまだ至っていないということも意味します。その続きがあり、その終点、完成の時が来る。私たちは今、その間にいることとなります。ですからこの福音書を読む者は、この福音のはじめを知り、それを受け取り、その完成に向けて神とともに歩む者であるようにとの暗示があります。私たちはこの書を読んで「神の子イエス・キリストの福音」を自らが受け取り、喜びをもってこれにあずかるとともに、この福音のゴールに向かって神がなお続けておられる働きのために生かされ、用いられる者たちとさせられて行きたいと願います。